

「嫌で仕方がなかった」 人生の転機で親代わり

「弟とおったら疲れる」と言いながらも満面の笑みで会話に応える小松義充さん（上野）。74歳になる現在も独身の義充さんは、妹・カズ江さん（71）と発達障がいをもつ弟・義明さん（66）の家族3人で暮らしています。

かつては故郷を離れ、商社マン、熱血教師として、忙しくも充実した日々を過ごしてきた義充さん。定年後も働き続けたいと考えていた矢先に母の訃報が届きます。家族の世話のため、義充さんは平成20年に志半ばで帰郷。母の後を追うように父も3年後に他界。その後は13年以上にわ

◎ 闘病中の老々介護／小松義充さん

妹と弟のために 一日でも長く

現在、自宅で妹と障がいをもつ弟の世話を続ける小松義充さん。自身も周囲の支援を受けながら末期がんと闘っています。「死」と直面する今、義充さんは何を想い、感じているのでしょうか。

末期がんの貴重な余命 最愛の妹と弟のそばに

救急搬送先の病院で告げられた病名は末期の「前立腺がん」。「手の施しようがない」と言われた義充さんは「ああ、命終わったな」と思いながらも「今まで精一杯やってきたから悔いはない」と語気を強めます。しかし、妹と弟の心配が尽きない義充さん。入院という選択肢もありましたが、以前、脳梗塞で倒れたときの義明さんの動揺した姿が忘れられず、自宅での治療を決意。現在は医療や介護の支援を受けなが

ら、がんの進行を遅らせる治療に励んでいます。

今後について「命を削って稼いできた財産を妹と弟が受け取れるように手続きをしたい」と口にした義充さん。「人生の幕引きを整えながらも、一日でも長く、そばで妹と弟を支え続けられるように、周囲の支えを借りながら毎日をかみしめて生きたい」と最愛の弟の肩を抱きしめました。



8つ年の離れた弟・義明さん（左）を赤ちゃんの頃から面倒を見ていた小松義充さん。「いくつ年を重ねても、弟はかわいい存在」と語ります。

新 型コロナの発生から約2年。流行当初は、正体不明の感染症に命が失われていく度、心を痛める日々が続いていました。しかし、現在では新たな生活様式にも慣れ、感染状況を見聞きしても以前ほどの感覚ではなくなってきたのではないのでしょうか。現代が抱える4つのテーマに直面している肉声から、死を想うことで、より生きることの大切さや愛おしさを実感する、「今を生きる意味」にスポットを当てます。

特集 **今を生き抜く**——死を想い、生を愛おしむ。



← 通院、訪問看護、デイサービス、配食サービスを利用して闘病を続ける義充さん。

My Treasure 私の宝物
小松家の思い出の家族写真



大学進学でこの町を離れた義充さん。高校までの写真が故郷や家族との思い出を唯一たどれるかけがえのないものになっています。

たつて義充さんが妹と弟の面倒を一人で見続けてきました。

脳梗塞で倒れ緊急入院 気づいた守るべきもの

家族で過ごす故郷の生活に慣れ、地域活動にも参加するようになっていた平成24年11月。義充さんは「脳梗塞」で倒れ、隣町の病院に緊急入院。厳しい状況でも常に妹と弟の心配をしていたとある極寒の日。雪が降る足場の悪い中、病院から約8kmも離れた自宅から「兄ちゃん、生活費がない。どうしよう」と動揺して歩いて来た義明さんの姿にたまらなく辛くなった義充さんは「妹や弟が生きていけない」と必死に治療やリハビリテーションに励み、奇跡の回復を成し遂げます。退院後、再び自分の身に何かが起きたとき、妹と弟の支援に入ってもらえるよう、自分には任意後見人、妹と弟には成年後見人を付けるなど、行政に相談しながらサポート体制を固めた義充さん。後遺症はあるものの安定した生活を送っていました。しかし、令和2年11月、再び大きな痛みが義充さんを襲います。

死が怖くないのかという質問に「今は生きていることだけで精一杯。自分の死について考える余裕がない」と答えた義充さん。「朝起きたら生きていること」に感謝する。日が暮れたら一日無事に過ごせたことに感謝する。毎日、ただその繰り返しでした」と遠くを見つめました。